

2021年度（第46回）学術研究振興資金 学術研究報告

学 校 名	大 阪 成 蹊 大 学	研究所名等	
研 究 課 題	効果的なレポート論題に関する実証研究	研究分野	教 育 学
キ ー ワ ー ド	①レポート ②論題 ③ライティング ④アカデミックライティング ⑤論証型レポート ⑥カリキュラムマップ		

○研究代表者

氏 名	所 属	職 名	役 割 分 担
成 瀬 尚 志	大阪成蹊大学 経営学部	准 教 授	研究代表 総括

○研究分担者

氏 名	所 属	職 名	役 割 分 担
笠 木 雅 史	広島大学 大学院 人間社会科学研究科	准 教 授	文献調査担当
児 島 功 和	山 梨 学 院 大 学 経 営 学 部	准 教 授	効果分析担当
崎 山 直 樹	千 葉 大 学 大 学 院 国 際 学 術 研 究 院	准 教 授	効果分析担当
高 橋 亮 介	東 京 都 立 大 学 人 文 社 会 学 部	准 教 授	論題分析担当
片 山 悠 樹	愛 知 教 育 大 学 教 育 学 部	准 教 授	調査設計担当

# 効果的なレポート論題に関する実証研究

## 1. 研究の目的

(1) 本研究の目的は、大学教員に対する web 調査およびインタビュー調査を通して、大学で実際に出题されているレポート課題に関して以下の点を明らかにすることである。

①初年次教育として設定されているアカデミックライティング指導科目（AW科目）においてどのようなレポートのタイプが指導されているかを明らかにすること。また、その中で求められている「論証型レポート」としてどのようなことが求められているかを明らかにすること。

②実際に出题されているレポート課題を収集し、教員のねらいに応じたタイプに分類すること。

③上記の分類に基づいて、それぞれの論題タイプにどのような特徴があるのか、また、そのタイプがどのような評価と親和性が高いかについて明らかにすること。

(2) レポート論題の多様性を踏まえた上での提言

レポート課題に関して教員のねらいを学生に伝えやすくするための分類方法に関する提言を行なう。

## 2. 研究の計画

(1) 調査設計

①2020年度に実施した予備調査を踏まえ、効果的な論題分析のための仮説形成を具体的に行ない、本調査に向けて質問項目を修正する。

②サンプリング調査のために、偏差値や学問分野を考慮し、調査対象の選定を行なう。

③web調査対象者の中からインタビュー調査を実施し、どのようなレポート論題を出题しているかについて、そのねらいとともに調査する。また、アカデミックライティング指導科目担当者には、その科目でどのようなタイプのレポートを書かせることを目指しているかについても調査する。

(2) 論題分析

①AW科目でどのようなタイプのレポート課題が求められているかを調査し分類する。

②インタビュー調査を通して、講義科目でのレポート論題に関して教員側のねらいを調査し分類する。また、そのねらいの分類に基づいて、web調査で収集した論題の分類を試み、実質的に機能する論題の分類について検討する。

## 3. 研究の成果

(1) 調査概要

研究メンバーの学問分野（哲学、歴史学、教育学）を専門にする大学教員にレポート課題に関するweb調査の依頼をし、そのweb調査の中で聞き取り調査への依頼を行なった。web調査は2021年11月～12月に実施し、129件の回答があった。また、インタビュー調査は2022年2月～3月に実施し、37名に対して半構造化インタビューを行なった。

(2) AW科目の調査

①AW科目担当教員4名（3大学）にインタビュー調査を行なった。また、大学教育学会誌で取り上げられていた授業実践2事例を加え5事例を分析した。調査から求められるレポートのタイプを分類する観点として「テーマ設定」「情報収集」「構成についての指示」「論証に関する具体的な指示」の4つの観点でそれぞれの事例を特徴づけられることがわかった。すべてに共通していたのは何らかの形の「論証」が求められていたことであり、この点はAW科目で指導されるのが「論証型レポート」であることを示している。

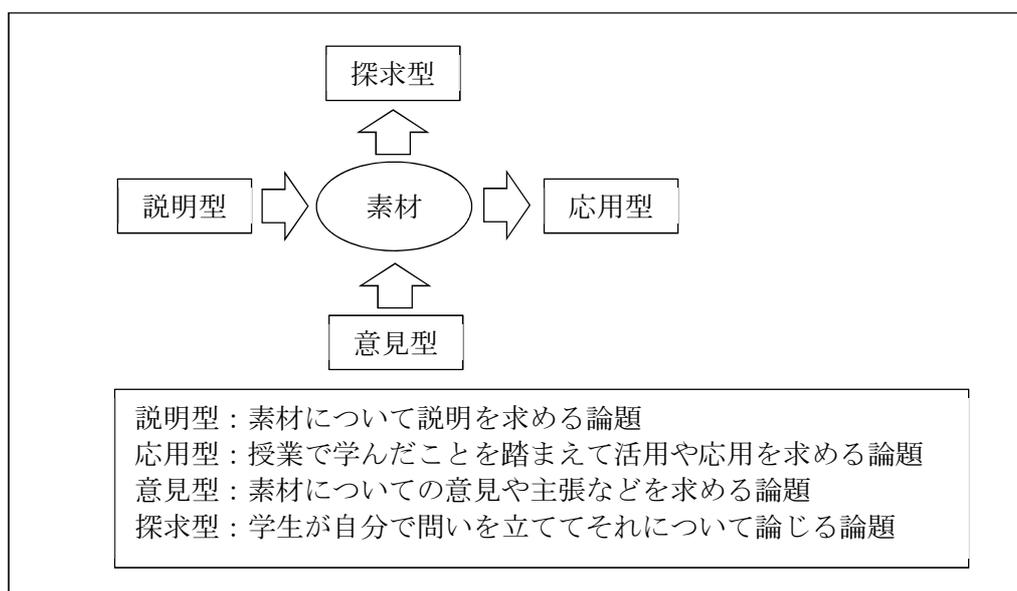
	事例 A	事例 B	事例 C	事例 D	事例 E
テーマ設定	自由	自由	教員が設定 (是非型)	教員が設定 (是非型)	教員が設定 (是非型)
情報収集	学生／教員	学生／教員	学生／教員	学生	学生／教員
構成についての指示	具体的な指示あり	具体的な指示あり	具体的な指示あり	具体的な指示あり	具体的な指示あり
論証に関する具体的な指示	根拠の提示	複数のパターンを提示	反論に対する反論の要求	反論に対する反論の要求	反論に対する反論の要求

②AW科目で「論証型レポート」が指導されるとしても、そこで求められているレポートの型は多様であった。事例CDEのように反論に対する反論を求めるケースもあれば、単に「根拠の提示」だけが求められているケースもあった。

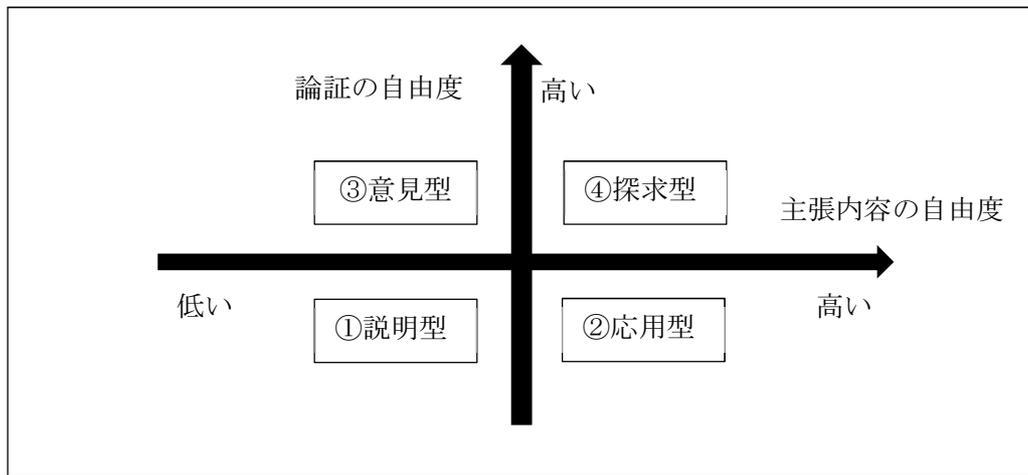
### (3) 文系講義科目のレポート課題の論題の分類

①論題を分類するに当たって文系の講義科目担当教員37名の教員にインタビュー調査を行った。その中で教員のねらいは、レポート課題で型を身につけさせることに重きを置く「型重視派」と、レポート課題では授業で学んだことを学生が応用できているかどうかを重視する「応用重視派」の大きく2つに分かれることがわかった。

②web調査で収集した91論題も含め、指示文レベルで分析した結果、論題は（上記の2分類を含めた）以下の4つのタイプに分類できることが分かった（以下の「素材」とは主に授業で説明されたことを指す）。



たとえば、「Aについて説明せよ」という論題は説明型に当てはまるが、この場合、レポートの内容は指定されたAに関するものでしかなく、その点で（主張）内容の自由度は非常に低い。一方、応用型に当たる「Bの事例を挙げ、なぜそれがその事例となるか説明せよ」という論題の場合、事例は具体的なものであるため自由度が高い（これを主張内容の自由度とする）。一方、根拠の部分に関しては、授業で説明されたことが根拠となるため自由度は低い（これを論証の自由度とする）が、それゆえ、この応用型は授業の理解度を確認するには有効であると言える（根拠の部分が固定されることで評価がしやすくなるため）。このように「主張内容の自由度」と「論証の自由度」という2つの観点で整理すると、先の4つのタイプの論題は下記のようにプロットできることがわかった。



#### (4) レポート課題の分類に関する提言

①すでに先行研究でも指摘されていたが、本研究の調査でも、教員のねらいが学生にうまく伝わっていなかったケースや、教員ごとに求められるレポートのタイプが異なることで学生が教員のねらいを誤解していたケースがあることがわかった。こうした問題を解決するためにも多様なレポート論題を分類することが必要であることが分かった。

②本研究で提示した4分類をベースに、「アカデミックレポート」と「学習レポート」という2つの名称を提案したい。アカデミックレポートはAW科目で指導されるタイプの論証型レポートのことである。卒業論文もこの論証型にあたることから、初年次教育としてのAW科目と卒業論文で求められるタイプは一貫していることが分かる。一方、学習レポートは4分類で言う「説明型」と「応用型」にあたる。これらの論題は必ずしも論証（の工夫）が求められているわけではなく、見出しなどの形式に関してもアカデミックライティングで求められているタイプのレポートとは異なっている。しかしながら、応用型に関して言えば、授業の理解度を確認するために効果的な論題であることから、講義科目のレポート課題で求められるべきものであると言える。しかしながら、これらはアカデミックレポートとは異なるという理解が、教員にも学生にも必要である。そのために、「アカデミックレポート」と「学習レポート」という分類は教員のねらいをうまく学生に伝えるためにも、また、学生が教員のねらいを理解するためにも有効なツールになると考えられる。

## 4. 研究の反省・考察

### (1) 研究の考察

①AW科目と講義科目でのレポートのタイプの違い：AW科目で指導されているレポートのタイプと講義科目で求められるレポートのタイプが異なっている（ケースがある）ことは、教員間では周知の事実ではあったがこれまで問題視されてこなかった。しかし、初年次で学んだレポートの書き方が、その後の講義科目で出題されるレポートを書く際に活かすことがそもそもできないのであればそれは大きな問題である。また、両者が別物であるとするならばAW科目を指導する教員も学生にそのことを伝えるべきである。しかしながら、現状ではその二つのタイプのレポートの違いに関して分類する基準がなかったため、ひとくくりに「レポート」と呼ばれていたのが現実である。しかし、実際に調査すると、AW科目で指導されているいわゆる「アカデミックライティング」では論証の工夫が求められているが、講義科目でのレポート課題（の一定数）はそうした論証の工夫はそもそも求められていないことがわかった。

②4分類の有効性：こうした違いは学生に混乱を生じさせるだけではない。教員自身もどのような論題を出せばどのような評価が可能となるかを理解していないことも明らかになることになった。これまでレポート課題の分類を目指した先行研究はいくつかあったが、実際の出題者のねらいをベースとし、論証の自由度と主張内容の自由度という二つの軸で分類することができたこの4分類は、実際に出題されている91論題を分類することができ、有効であることがわかった。

③カリキュラムマップの実質化に向けて：本研究で示された4分類はある程度の段階性を有

している。探求型は非常に自由度が高く、卒業論文で求められることそのものである。学生自身が問いを立てることは非常にハードルが高いが、卒業論文を執筆する際にはかならず身につけておかないといけないスキルである。一方、説明型や応用型は講義科目でのレポート論題として数多く見られたが、そうした論題にしか取り組んでいないのであれば、学生が問いを立てる能力は養われない。つまり、卒業論文で問いを立てることが求められているならば、どこかでその能力を養わないといけないのである。現在、多くの大学では、カリキュラムにおける各科目の目標を整理するためにカリキュラムマップが作成されている。多くの場合、どの科目でどの能力が養われるかを整理したものである。こうしたカリキュラムマップは、カリキュラムを通して体系的にゴールとなるディプロマポリシーで求められる能力を身につけるために非常に重要である。しかしながら、そのカリキュラムマップがどれほど実質的に機能しているかに関してはまだまだ改善の余地があるのが現状であろう。こうした現状において、本研究で示された論題の4分類はあらたなカリキュラムマップのモデルとして機能すると考えられる。つまり、各科目で出題する論題が4つのタイプのうちのどれであることを示すことで、卒業論文執筆までのステップを明確にするのである。現時点でそうした論題をベースにしたカリキュラムマップについてはまったく検討されていないが、卒業論文を教育上のゴールとするのであれば、有効な選択肢となり得るだろう。また、従来型の養う能力によるマッピングとは異なり、具体的なレポート論題としてのマッピングのため、各授業に対する影響力も高く、成否に関する評価もしやすくなると考えられる。

## (2) 研究の反省点

分野ごとの回収率のばらつきがあったため、分野ごとの統計的分析にまでいたらなかった点が改善の余地として挙げられる。また、web調査において教員のレポート観（レポートにおいて重視していることや評価する際のポイントなど）を調査しているが、その教員が出題している論題を本研究で見いだした4分類に基づいて分析した上で、その教員のレポート観とどういった関係があるのかについてはまだ十分分析できていないため、今後継続して分析していきたい。

## 5. 研究発表

### (1) 学会誌等

なし

### (2) 口頭発表

①成瀬尚志「レポート課題を軸に考える授業設計—剽窃を防ぎ、学生を思考にいざなうレポート課題の設定—」2021年度第1回中京大学FDセミナー、2021年9月14日

②成瀬尚志「ファシリテーションから考えるレポート課題」第4回ファイシリテートされる・する研究会、2022年2月18日

### (3) 出版物

なし